

## サウジアラビアに暮らす — Amazing Saudi Arabia —

リアド日本人学校教頭 和田 茂 久

## 1. はじめに

ここアラビアでは、雨は幸運の象徴。神からの最高の贈り物なのだから…。

真夏には、50℃まで気温が上昇することもめずらしくはない、強烈に暑く、そして乾燥した砂嵐の国サウジアラビア。それでも、1年にほんの数日、季節の変わり目に雨の降る日がある。そんなめずらしく雨が降った日のことだった。

いつものガソリンスタンドへ給油のために立ち寄ると、そのあまりのきたなさに「洗っていけば？」と勧められ、誘われるままに洗車することに…。ぼうっとその雑な洗車を眺めていると、いかにもアラビア人といった面持ちの民族衣装であるトープにシュマーガをきちんと身につけた1人の紳士がニコニコと近寄ってきた。「君はどこから来たの？ 出身は？」ときいてくるのも、日本人がほんのちょっとしか住んでいないリヤドでは、そんなにめずらしいことでもない。

彼は、アッラーの神の偉大さを、やさしいアラビア語を選びながら、ときには英語を織りまぜて、熱心に話してくれた。しばらく語り続けた後、「食べて、飲んで、眠って…。私たち人間と動物の違いは、一体どこだと思う？」と、私を試すようにきいてきた。そして、「私たち人間は、よけいなことを考えるだけ動物よりも始末が悪い。」と、自分に言い聞かせるようにいったあと、しばらく黙り込んでしまった…。ふつうの人が、初めて会った人に「神の教えを説く」なんていうことも、ここではごく当たり前のこと。最後に彼は、「コーランをよく読んでみなさい。」とあって、きれいに磨き上げられた車に乗り、右手を軽くふると、何事もなかったかのように走って行ってしまった。

私の洗車も終わり、お金を払うときになった。

財布を出そうとすると、その手を押さえて、「おまえの分はもうもらってあるよ。さっきのおまえの兄弟から…。」と、スタンドの馴染みのおじさんがいうのに驚いて、「そうはいかないよ、俺の分は支払わせてよ。」と、申し出ると、「彼の心が無駄になるじゃないか。」と、優しく諭されてしまった。

知らない間に「兄弟の分」と支払ってくれた「アラビア人の兄」の心配りに自然と頭が下がる。金額以上にその思いやりがたまらなく心にしみる。文化も考え方も生活もすべてが異なるイスラムの国の片隅で、無我夢中で生活している日々。たとえようもなくその温かさが胸に迫ってくる。

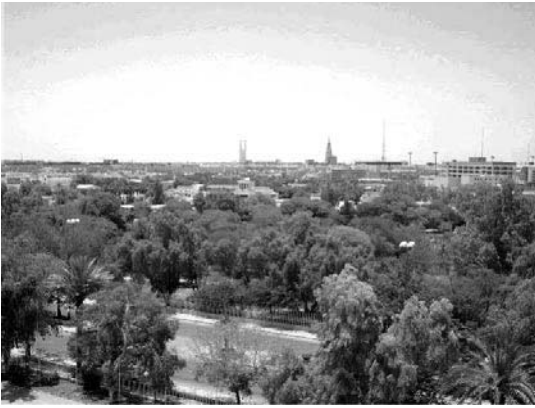
それから、それから…。決して高くない賃金をやりくりし、わずかなチップを大事に貯めては、故郷に送金している出稼ぎ労働者のスタンドマンの彼ら。黙っていれば2台分の料金が手に入っただろうに「彼の心が無駄になる」と心に心で応えようとしている彼らの真心に、心が動かされずにはいられない。「じゃあ、また。シュ克蘭！」と、スタンドを出ようとする、この日にかぎってまた雨が降り出した。おじさんの叫ぶような声に送られて帰路につく。

「また、兄弟にここであえるぞ、いい雨だ！」ピカピカのボンネットを流れる雨が、街の灯に輝く。

ここアラビアでは、雨は幸運の象徴。神からの最高の贈り物…。

## 2. すべては「イスラーム」のために

「イスラーム」は、アラブの予言者ムハンマドが610年に創唱した一神教。正しくは、アラビア語



リヤド市郊外 ディライヤから中心部を望む

で「イスラーム」といい、「唯一の神アッラーに絶対的に服従すること」を意味する。イスラーム教徒を「ムスリム」というが、これは「絶対的に服従する者」を意味する。

平和を意味する「サラーム」という言葉から生まれたともいわれている「イスラーム」。いずれにせよ、「人々の日常生活を司る教え」が「イスラーム」である。当然のことながら、「イスラーム」とは何よりもまず宗教だ。しかし、現在、人々の関心の対象となっているのは、それを信ずる人々の、社会的、政治的動向に偏っている傾向があるのではないかと感じている。「イスラーム発祥の地」サウジアラビア。そこに暮らす人々を理解することは、「イスラーム」を正しく理解するという他に他ならない。



### 3. イスラーム国家としての誇り

イスラームが他の宗教と比べ際だって異なる点は、単なる宗教ではなく、それが生活全体の厳格な規範となっている点にある。

サウジアラビア王国は、1930年代に、サウド家がワッハーブ主義を基本として起こした国であり、国名「サウジアラビア（サウディアラビア）」は、「サウド家のアラビア」を意味する。1992年になって発布された統治基本法（成文憲法）では、「この国はクルアーン（コーラン）とスンナ（ムスリムの守るべき正しい基準）に基づくアラブ・イスラーム国家である」と規定している。つまり、こ

の国では、「アッラーの教えをいかに忠実に実行できるか」ということが、なにより重要であり、「アッラーの教えを忠実に実行すること」が、この国の最大のアイデンティティであり、その結果、この国では、「アッラーの教えを忠実に実行する」ということに向けて、生活のすべてが形作られている。



### 4. サウジアラビアでの生活

「イスラーム発祥の地」であり、「マッカ（メッカ）とマディーナ（メディナ）」というイスラームの二大聖地を持つサウジアラビアは、100%ムスリムの国だ。つまり、サウジアラビアに暮らすということは、100%ムスリムの中で生活するという他に他ならない。

そこで、この国で生活するためには、数え切れない禁止事項についての知識と理解が必要となる。

よく知られていることだが、サウジアラビアでは飲酒、アルコールの売買などは堅く禁じられており、見つければ厳罰が待っている。日本製の醤油やみりんさえも、アルコールが含まれているという理由から持ち込むことも使用することもできない。当然ながら、豚肉は一切手に入らない。外出する際の女性のアバヤ着用については、外国人女性に対しても、サウジ人女性同様に要求される。サウジ人女性は、目もベールで覆い、手袋すらはずさない方も多い。イスラーム諸国にあって、他に例を見ない厳格さである。しかしアバヤには、砂埃や強い日差しから守ってくれるという、実用的で優れた一面もあり、意外に気に入る外国人女性も多いと聞く。すべて、この国の禁止事項には意味がある。宗教上の理由であったり、気候風土によって培われた知恵から生まれたものであったり…。一見厳しく、理不尽にも思われるおびただしい禁止事項の中にこそ、この国の文化と歴史が隠されている。



アバヤを纏った女性